



ファイナンス・イノベーションとは(総論 その2)

～企業経営におけるファイナンス理論とイノベーション～

ファイナンス理論は、最先端経営のベースとなっている。日本で使われているファイナンスはもともと資金調達を意味する言葉であったが、欧米で使われているファイナンスの意味はもっと幅の広い概念である。

MBAなどで取り上げられているファイナンスは、「インベストメント(投資)」と「コーポレート・ファイナンス(企業財務)」の2つに分けられている。「インベストメント」とは金融資産に対する投資であり、「コーポレート・ファイナンス(企業財務)」とは企業経営での投資と資金調達である。インベストメント分野では、金融資産に対する投資をどのように行うべきかを考えなければならないことから、ポートフォリオ理論やCAPM(Capital Pricing Model)、オプション理論などが生み出された。また、コーポレート・ファイナンス分野では、実物資産に対する投資と資金調達をどのように行うべきかを考えなければならないことから、投資決定理論、MM(モジリアニ・ミラー)理論などが生み出された。

この二つの分野の理論は別々のものではなく、インベストメント理論を基礎としてコーポレート・ファイナンス理論が成り立っている。また、コーポレート・ファイナンス理論の基本となっているのは、キャッシュフロー、現在価値、インベストメント(CAPM)、資本コスト、NPV(正味現在価値)などであるが、この理論は多くの大企業の経営戦略にとり入れられ、重要な経営技術となっている。これを可能にした背景にはIT技術の発達があった。

ところで、このファイナンス理論はIFRS(いわゆる国際会計基準)の基礎理論となって、世界に広がりを見せている。他方、仮定の値を代入しなければならないことから確実性に限界があるとか、「キャッシュフローの分配」を考える理論であり「キャッシュフローを増加」させることができない等の批判がある。しかし、批判をする者もファイナンス理論の有効性を完全に否定している訳ではない。

日本企業が今後国際競争で生き残っていくためには、このファイナンス理論を前向きに活用し、経営のパラダイム転換すなわちイノベーションを図っていくことが必要不可欠と思われる。

また、ファイナンス理論においても、企業経営の戦略変化に今以上に貢献できるようにイノベーションを図っていく必要がある。「リスクを極小化してキャッシュフローを極大化する」という企業経営の命題は変わらないと思うが、経営戦略は時代とともに大きく変わるからである。

*参考資料:「MBAファイナンス」グロービス・マネジメント・インスティテュート著、ダイヤモンド社

「まだ『ファイナンス理論』を使いますか?」手島直樹著、日本経済新聞出版社